

ばね定数 k のばねおよび質量 m の質点からなる 1 自由度系の運動方程式は

$$m\ddot{u} + c\dot{u} + ku = f \quad (1)$$

と表される。ここに、 u は質点の変位、 f は外力、上付きのドットは時間微分を表す。両辺を m で割り、固有振動数 ω および減衰定数 ξ を用いて表せば

$$\ddot{u} + 2\xi\omega\dot{u} + \omega^2u = a \quad (2)$$

となる。ここに、 $a = f/m$ は系に作用する加速度である。運動方程式 (2) を以下に概説する有限差分法により離散化し、表計算ソフトウェア等を用いて、時刻歴応答を解析する。

そもそも微分の定義は

$$\frac{du}{dt} = \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{u(t + \Delta t) - u(t)}{\Delta t} \quad (3)$$

である。これに対し、差分は Δt を小さいが有限な大きさとどめることにより、

$$\frac{du}{dt} \simeq \frac{u(t + \Delta t) - u(t)}{\Delta t} = \text{差分} \quad (4)$$

と微分の近似値を定義するものである (ただし、差分の定義は他に無数に存在する)。Taylor 展開を用いると、

$$u(t + \Delta t) = u(t) + \frac{du}{dt}\Delta t + \frac{d^2u}{dt^2}\frac{\Delta t^2}{2} + \frac{d^3u}{dt^3}\frac{\Delta t^3}{3!} + \frac{d^4u}{dt^4}\frac{\Delta t^4}{4!} + O(\Delta t^5) \quad (5)$$

となり、これより

$$\frac{du}{dt} = \frac{u(t + \Delta t) - u(t)}{\Delta t} + O(\Delta t) \quad (6)$$

となり、式 (4) は Δt に関して 1 次のオーダーの精度を有していることが分かる。少し工夫する (式 (5) から後述の式 (8) を辺々差し引く) と

$$\frac{du}{dt} = \frac{u(t + \Delta t) - u(t - \Delta t)}{2\Delta t} + O(\Delta t^2) \quad (7)$$

のように、2 次精度を有する差分も導くことができ、中央差分と呼ばれる。

同様に 2 階微分に相当する差分を求めてみる。式 (5) と

$$u(t - \Delta t) = u(t) - \frac{du}{dt}\Delta t + \frac{d^2u}{dt^2}\frac{\Delta t^2}{2} - \frac{d^3u}{dt^3}\frac{\Delta t^3}{3!} + \frac{d^4u}{dt^4}\frac{\Delta t^4}{4!} + O(\Delta t^5) \quad (8)$$

を辺々加えることにより

$$u(t + \Delta t) + u(t - \Delta t) = 2u(t) + \frac{d^2u}{dt^2}\Delta t^2 + O(\Delta t^4) \quad (9)$$

を得る。これより 2 階差分

$$\frac{d^2u}{dt^2} = \frac{u(t + \Delta t) - 2u(t) + u(t - \Delta t)}{\Delta t^2} + O(\Delta t^2) \quad (10)$$

を得る。 Δt に関して 2 次のオーダーの精度を有していることに注意。

表記を簡単にするために $u(t) = u_i$, $u(t + \Delta t) = u_{i+1}$, $u(t - \Delta t) = u_{i-1}$ とおく。式 (7), (10) を運動方程式 (2) に代入し, Δt^2 を掛けると

$$(u_{i+1} - 2u_i + u_{i-1}) + \xi\omega(u_{i+1} - u_{i-1})\Delta t + \omega^2u_i\Delta t^2 = a_i\Delta t^2 \quad (11)$$

となり, u_i と u_{i-1} が分かっているならば, u_{i+1} について逐次解くことができる。このような解法を陽解法と呼ぶ。陽解法は簡便だが, 計算を安定に進めるためには, 時間刻み Δt がある程度小さくなくてはならない。

振動台実験との比較についての補足

静止した座標系における質点の変位を u , 地盤 (振動台) の変位を u_g とする。地盤からみた質点の変位は $u_r = u - u_g$ である。

質点の運動方程式は, 質点の変位 u および相対変位 u_r を用いて

$$m\ddot{u} + c\dot{u}_r + ku_r = 0 \quad (12)$$

と表せる。 $u = u_r + u_g$ を運動方程式に代入すると

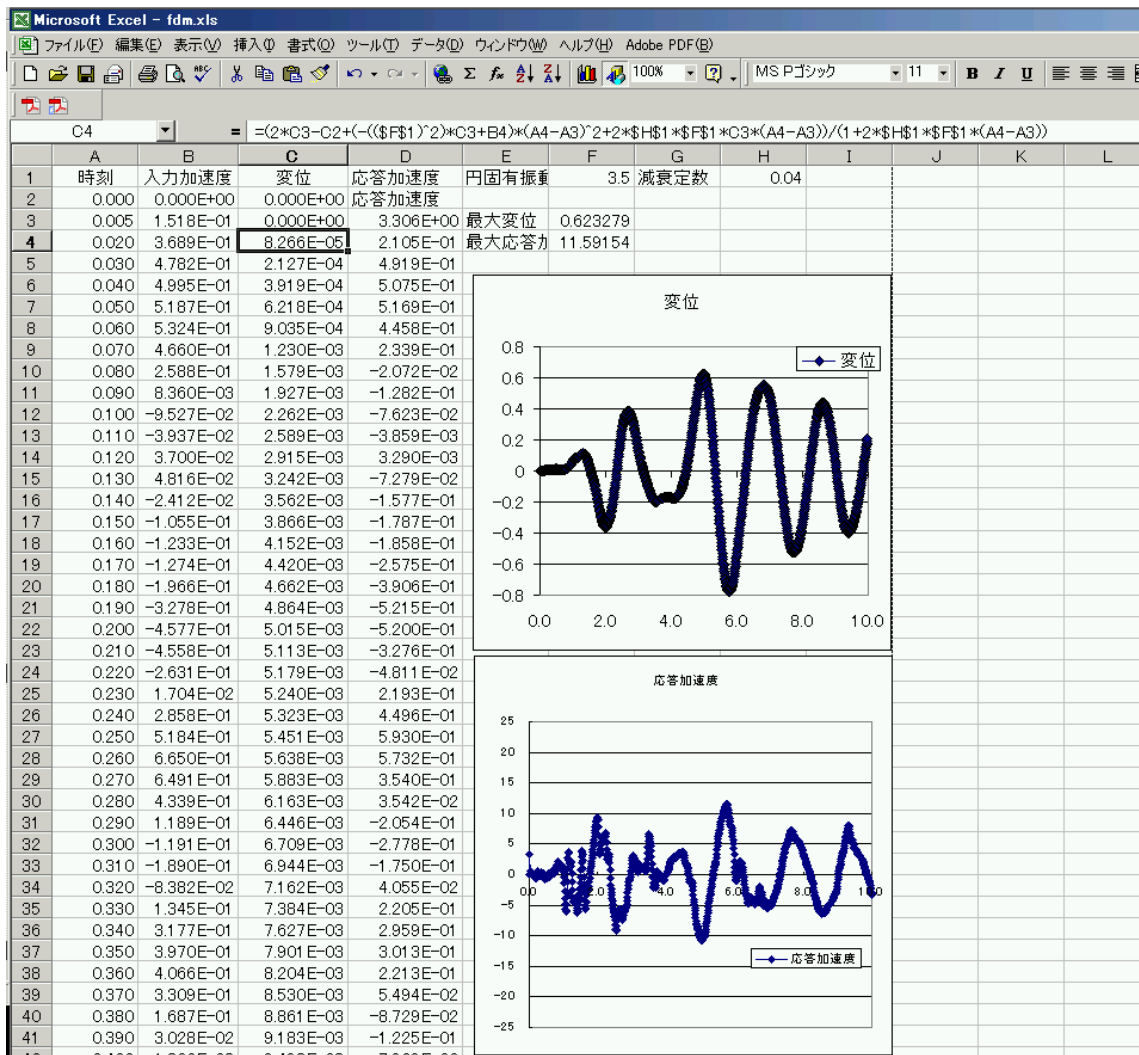
$$m(\ddot{u}_r + \ddot{u}_g) + c\dot{u}_r + ku_r = 0 \quad (13)$$

となるので, 地盤の加速度の項を移項すると

$$m\ddot{u}_r + c\dot{u}_r + ku_r = -m\ddot{u}_g \quad (14)$$

となり, 地盤の加速度を外力と考えることで, 運動方程式を解くことができる。

実験で計測される加速度は, 質点の変位に対する加速度であるので, ここでの解析で求めた u_r から, 2 階部分の近似式を用いて加速度を求め, その加速度に地盤の加速度を加えた加速度, すなわち $\ddot{u} = \ddot{u}_r + \ddot{u}_g$ と比較しなくてはならないことに注意しよう。



表計算ソフトでの振動解析結果 (例)

式 (11) から, u_{i+1} を求めるために, 陽な形に整理すると以下のようなになる.

$$u_{i+1} + \xi\omega u_{i+1}\Delta t = a_i\Delta t^2 + 2u_i - u_{i-1} + \xi\omega u_{i-1}\Delta t - \omega^2 u_i\Delta t^2 \quad (15)$$

$$(1 + \xi\omega\Delta t)u_{i+1} = -\ddot{u}_g\Delta t^2 + 2u_i - u_{i-1} + \xi\omega u_{i-1}\Delta t - \omega^2 u_i\Delta t^2 \quad (16)$$

$$(1 + \xi\omega\Delta t)u_{i+1} = 2u_i - u_{i-1} + (-\omega^2 u_i - \ddot{u}_g)\Delta t^2 + \xi\omega u_{i-1}\Delta t \quad (17)$$

$$u_{i+1} = \frac{2u_i - u_{i-1} + (-\omega^2 u_i - \ddot{u}_g)\Delta t^2 + \xi\omega u_{i-1}\Delta t}{1 + \xi\omega\Delta t} \quad (18)$$

ここで, $a_i = -\ddot{u}_g$ とした.

この関係より得られる u_i は相対変位のため, それらより 2 階差分 (10) を用いて \ddot{u}_r を求め, これに地盤の加速度 \ddot{u}_g を加えたものが絶対加速度 (応答加速度) となる.